妹にvtuberだといわれた矢先に上司の悪乗りでvtuberになった。

haryu

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある大手ゲーム会社に勤める俺が当社の大ヒットシリーズをやっているｖｔｕｂｅｒの妹の参加型の配信にサブ垢（ランクカンスト）で乱入してからいろいろなことに巻き込まれるお話。

気が向いた時だけ執筆します。

※この物語はフィクションです。実在の人物・団体とは一切関係ありません。

旧名『とあるゲームの開発陣営兼ＴＡ勢の俺が妹の配信に乱入するお話』

旧題『とあるゲーム会社の広報でＴＡ勢の俺が妹の秘密を知ってからいろいろなことに巻き込まれていくお話』

小説家になろう様では複合前を投稿しております。
なろうバージョンをネトコン11に応募してみました。

目次

プロローグ
1話　全ては上司から。＋2話　呼び出し。――――――――1
3＋4話　会議――――――――8
5＋6＋7話　妹はｖｔｕｂｅｒ――――――――13
8話　社長に呼び出された。――――――――26
9＋10話　緊急事態とお買い物――――――――31
11＋12話　事務所と掲示板――――――――41
13＋14話　引っ越しと戻る――――――――49
15話　これが私のガワですか（困惑）――――――――57
第一章
16話　自己紹介配信直前――――――――63
17話　初配信――――――――66
18話　掲示板より。――――――――71
19話　一狩り行こうぜ!!――――――――79
20話　一狩り行こうぜ!!2――――――――94
第14話――――――――102
22話　雑談配信ｖｏｌ．1――――――――108

プロローグ
1話　全ては上司から。＋2話　呼び出し。

1話

【2月X日】

「神坂久遠(かんざかくおん)君、私は知っているよ。」

そんなことを彼、宮下　D(ディレクター)はそう言ってきた。

場所はとあるスタジオもといい私が勤めてとあるゲームの運営をする大手ゲーム会社。

「何をですか?」

「惚ける気かね君。君が開発、運営のトップだというのに自分たちが作ったものの最高難易度のクエストをタイムアタックしているそうじゃないか、それも、自分の声に似ているボイス38を使ってさ。」

何で知っているのさ。私はそれが事実だったので顔が驚愕に染まった。

「おや、その反応は図星かな。まぁ、私は君を責めることは無いよ、何なら会長に頼んで私の右腕にしたいくらいだ。」

なんだって、この上司、オッサンの私を右腕に置きたいって？大出世だよそんなことがあったら、今の私は入社二年目の平なんだからさ。いやまぁ、キャリアでもともといい位置にいたけどさそれは偶々なんだよ。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

【3月X日】

そして、そんなことがあってから一ヶ月後、私はＳＮＳで情報を公開する人、要は広報の中の人になった訳である。

どうしてこうなったといろいろと手順を組んで社長に直談判しに行ったら、
「宮下君が君のことを大絶賛していてね、それと、予定されている次回作もディレクターは変わるけど広報は君だからね。頑張ってね～。うふふふ～。」

という感じだった、因みに会長は女性だしかもかなり若い。

というか、やっぱり他の部署があれてると思ったら次回作がそろそろなのか、そういえば、今作もそろそろ最終アップデートの準備だったかな、私はその時に作成組から広報になったけど。

同僚から羨ましがられたけど。簡単に言えば、作成組、ブラックではないがだいぶハード、残業代はきちんと出る、一応ＥＤで全員の名前が載る。広報、匿名会社内ではわかる、本編で出てくるキャラの声優にでもならないとＥＤで名前が載らない。けどまぁ、広報はネット内のディレクターの代理だったりでほぼずっと、ディレクターの近くにいる、っていう感じなんだよね、まぁ、先行データをディレクターが特別に私の本垢にＤＬしてくれるけどそのせいで普段使ってるデータが使えなくなったから新しい

データ作って一からする羽目になったんだよね、ランクとエンドコンテンツのレベルは上げれるところまではカンストしたからね。ちなみにタイムはざっと２００時間、長期休暇の間ほぼずっとやっていた。

因みに今年の春から高1の妹はもう受験が終わって合格発表もされていたのでやけに話し声が聞こえるけど、楽しくゲームでもやっているんだろう。

そんなことことを思っていると電話が鳴った、誰だと思って着信画面を見てみると宮下Dだった。

『もしもし、宮下です。』

「もしもし、おはようございます。どうしたんですか、電話なんて。」

『それについては、自分が担当なわけじゃないんで、ほんじゃ電話を担当者に代わりますね。』

なんかあるんだろう、例えば次回作の広報に抜粋とか。

『やぁ、初めまして、神坂君。私は紅宮凛、宮下の同期で宮下と別のグループのディレク

ターよ。』

違うディレクターということはまぁそういうことでしょうね。

「あの、もしかして、新作発表ですか？」

『そうよ、そして、明日は君出勤だよね？』

私は脳内の手帳で確認しながらそう答える。

「そうですね。」

『じゃあ、明日の午前十時から第三会議室に来てね。』

「分かりました。」

第三会議室って、なかなか終わらない会議をするところで有名なところじゃん。

明日は定時無理だな絶対に。

料理、妹の分作り置きしておかないとな、明日七時に家を出る前に昼と夜作り置きし

ておくから食っとけよって妹に言っておかないと。親父は教師だし、なんか今年は生活指導だ、とか言ってたな。

妹とは、学年は中3、今年から高1、そして高校受かってから引きこもり気味、私は二十四歳で妹が十五才だったら義妹かと思うかもしれないがただただ年が離れているだけの実妹だ。

そういえば今何時だ、スマホを電話のために起動したのに時間見てないじゃん。えっと、PM10時か、明日は七時に出るために五時半に起きないといけないから、妹に早く寝ろー、とか。明日は早く出てくから、とか言わないとな。

私は部屋から出て隣の妹の部屋の扉の前に行く、そして三回ノックして、

「兄だぞー。」

と言う、すると部屋の中で少しドタバタしているのが聞こえてきた、妹よ誰か家に上がらせているんじゃないだろうな。

そして少し待つと扉が開いた、そしてその中から妹が出てきた、かわいい。愛でたい。

「お兄、何？」

「明日俺が早く帰ってこれなさそうだから、あと、行く前に昼食と夕食作っておくからそれ食べろよな。あと、早く寝なさい。」
「分かった。」
そう言うと妹は扉を閉めた。
眠い、その日は明日のご飯を作ってから寝た。

３＋４話　会議

【３月Ｘ日】

俺はスーツ姿でイヤホンで曲を聴きながら自転車を漕いでいた、何の曲を聴いているかと言うと俺がＴＡしたり広報をやっていたりするモンスターハント通称ＭＨシリーズの曲だ、因みに俺が勤めている会社はＧ＆Ｃ株式会社で、今やゲーム好きで知らぬ者はいないほどのゲーム会社だ。

本社は東京駅から徒歩１０分の位置にあるのだが、あいにく俺は東京駅に行くのにＪＲと私鉄を使って１時間ほどかかる駅が最寄り駅でさらに駅まで１０分くらい自転車で走らなきゃいけないところに住んでいるのだ。

？華街があるし田舎ではないよな？な？

まぁ、そんなことは置いておこう。

そういえば、最近ｖｔｕｂｅｒとかいうのが人気らしい、三日前の親父からの情報だ

けど。俺の場合はG＆Cの情報が次々と流れてくるだけなんだけどな。

まぁ、今のところ見るつもりはないんだけどね、スマホ代を自分で出しているからあまりGを使うわけにはいかないからね、曲はスマホに落としているから問題ないんだよね。ネットが繋がっていないところでも聴けるからね。

その後も、俺は曲を聴きながら電車に乗って移動していった。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

午前九時四十五分、会議の十五分前だ。

会議室に入ると、大量に人がいた、簡単に言うと広報組俺含めて5人、因みに俺が広報組のネット担当、他にも案件依頼担当とかいろいろといる。そして俺は広報組のところにある俺の席に座った。

因みに広報組以外で来ているのが、紅宮Dと作成組チームΔ（デルタ）が、各部門から五人ほどか。部門っていうのは簡単に言うとプログラム部門とデザイン部門だ。

俺が前に居たのは作成組チームα（アルファ）のプログラム部門だ。入ってから一年目で新作製作開始の翌年に発売で発売直後に広報組に出世という感じだ、ディレクターを除く作成

組は広報組より下だからね。勤務日数も減るし。

そんなことは置いといて。

本当、何を話すんだ。

そして、十時になり紅宮Ｄが会議室に入って来て、会議が始まった。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

紅宮Ｄがいろいろと話していく、次回作を発表すること、そして、その発表をするのに時代の流れに乗ってｖｔｕｂｅｒを使おうということ、そして、そのｖｔｕｂｅｒの中の人を広報組から選ぶというものだった、因みに選び方は声、プレイスキルの二つがいい人を選ぶらしい。じゃあ、俺じゃないな声はさほど良くないしプレイスキルも全武器で現段階での最高難度、古滅龍ヴェルジェ・ツェアシュテーレンを１０分以内に討伐しているだけだ、他に十分以内で討伐したというのはまぁ少しだけ聞いたことがあるくらいだからね。

それと、新しく広報組の派生にｖｔｕｂｅｒグループを作るらしい、どうも、本当にｖｔｕｂｅｒ人気の流れに乗って別の方面でも会社の売り上げを増やしていこうとい

うことらしい…因みにｖｔｕｂｅｒグループに入った場合普通に会社からの収入にプラスされて広告代の七割とスパチャという投げ銭機能の七割が合計の収入になるらしい。

正直言ってかなりのギャンブルだなと思った。売れなかったら損をすることになるからだ、まぁ、利点もあるそれはグッズだ、全て社内で完結できる、なぜかと言うゲーム関係のグッズもコラボ以外は社内で生産ラインを持っているからだ、ぬいぐるみもＣＤもだ。因みに一期生は先程の選ばれた広報組にするらしく二期生以降は内部だけでなく外部からも募集するらしい。あと、活動に制限を設けないらしい、別にほかの事務所とコラボしてもいいし他社の案件を受けてもいいし、他社のゲームをやってもいいとのこと。

あと、呼び出されない限り出勤しなくていいとかなんとか。

そして、本命、ＭＨシリーズの最新作の発表、因みに俺は今日まで知らなかった。でも、どうやら、二年前から製作はしていたらしい。そして、発表はもともとあるｙａｏｔｕｂｅのチャンネルでやってさらにその枠でｖｔｕｂｅｒグループの告知もするのだとか。

ちなみに新作というのが、モンスターハントで、７作品目のナンバリングタイトルだ

Ｘはクロスプラットフォームという意味で５は４の次ではなくワールドとイリュージョンを挟んだ感じになっている。

そんなことを聞いていたら会議は終わっていた、珍しい。普段なら５時間会議とかこの会議室使う時だと普通なのに一時間しか経っていない。今日はきちんと定時退社できそうだなぁ、と思いながらいろいろと作業をしていた、因みにオーディションは来週中で選ばれるのは３０人の中から５人だけらしい。

さて、仕事を片付けますか、主に今日の会議についてね。

そんな感じで仕事に取り掛かり、すべて五時までに終わり定時で退社した、良かった残業にならなかった。

そんなことを思いながら俺は帰路についた。

５＋６＋７話　妹はｖｔｕｂｅｒ

【３月Ｘ日】

七時には家に着いた。

玄関に入るとやはり父親の靴は無く妹の靴だけだった。朝見た時と配置が変わっている、外出でもしたのだろうか。

洗面所で手を洗ってキッチンに行く、そして冷蔵庫を開けると夕食用のやつだけ残っていた、昼食はしっかり食べたようだ。俺は前から買っておいたカップ麺を食べる、ちなみに塩ラーメンだ。

そういえば、昼食用に使った皿が無いな、おそらく自分の部屋に持ってて昼食を食べたのだろう、よし、回収しに行くか。

そう思い俺は皿を回収するために二階に上がり、妹の部屋の扉をノックするすると昨

日とは違いすぐに出てきた。
「お兄、何か用？」

可愛い。さすが愛しのマイシスター。

「昼食の皿の回収だよ。」
「そう、分かった。あと、後でゲームしよ。（私は配信しながらやりたいし。まぁ、それはお兄ちゃんには黙っておこっと。）」

妹が何か隠している感じだったがまぁ、大丈夫でしょう。あと、最新アップデートで追加されたクロスプラットフォームサーバーを立ち上げておいてもらお。

「あ、皿洗っておくからその間にいろいろとやっておいて、クロスプラットフォームサーバー立ち上げておいたりとかさＶＣ繋げたりとか。」
「え～、ＶＣ。え～。（ちょっと待って、配信にお兄ちゃんの声入るんだけど。）え、えっと、お兄ちゃん。」

なんか言いたいことがありそうなんだよな。

「何か言いたいことがあるのか、妹よ。」

「あ、あのさ、お父さんには内緒にしてるんだけどさ、私、ホワダイっていう名前でｖｔｕｂｅｒやってるの、企業勢の。」

「へぇー、それで。」

「それでって、あのね、Ｖの実況とかって基本中のお人関係の人って出てこないの。まぁ、別にいいよ。どうせ、お兄ちゃん対して強くないんでしょ。」

「さぁ、どうだろうね。」

そう言い、俺は皿をもって階段を下りて行った。後ろから「どうだろうねって。」という声が聞こえたような気がした。

へ～。妹ってｖｔｕｂｅｒだったのか。チャンネル登録しないとな、後画面二つ以上あるから片方にＮｙａｎｔｅｎｄｏ　ｓｗａｔｃｈのｙａｏｔｕｂｅアプリで配信画面開きながらやろうかな。よしそうしよう、そして、俺はいつもより早くそしてしっかり皿を洗うのだった。

ｙａｏｔｕｂｅでホワダイと検索っと、多分これだろうな。
一番最初に出てきたライブ中ってなっている動画を押す、因みに自室には画面は３面ある、因みに全部収入からだｙａｏｔｕｂｅを開いているのはＮｙａｎｎｔｅｎｎｄｏｓｗａｔｃｈだ。他にもプレイングステーション５や、本体だけで５０万円するｐｃが一台、１０万位するノーパソが一台っていう感じだ。因みに同じアカウントで使える奴は全部同じアカウント使っているわけで、一番いいパソコンを使ってプレイしていきますか。
正直言ってキャプボも買ってあるからいつでも個人で配信できるんだけどね

あ、配信画面がカウントダウンからｏｐに変わってる。
そろそろ始まるなぁ。

『ハロハロ～、ホワダイだよー。今日はお兄ちゃんとモンハンやっていくよ～。』

・モンハンかー。

・視聴者参加型じゃないのね。
・兄がいたのか、彼氏なのか。

『彼氏なわけないよ、兄だよ。それじゃあ、集会所に来てもらおうか。』

郵便屋さんのニャンコのところでフレンドのところから妹のアカウントを選択してパスワードを打ち込んでっと。

ｋｕｏｎが集会所に参加しました。

『来たから、ＶＣオンにしましょうかねぇ。』

どうやら、ディスコードがミュートにされていたようだ、まぁ、そうだよな。

「どうも、ホワダイの兄ことｋｕｏｎです。」

『え、待って。お兄ちゃん、不正してないよね？』

・ランクカンストｗｗ
・もしや、探求レベルも。

『そんなことあるわけ。はぁ、５００、現段階最高レベルじゃん。』

・は？やばっｗｗｗ
・装備、化け物装備だったりして。
・装備見て、装備。

『装備ね、分かった。え？マジで言ってる、納刀術３御守と火力マシマシの太刀。』

・ＨＡ☆ＤＡ☆ＫＡ
・→裸ではないぞ、御守持っているから。
・せや。

「あ、大丈夫。これ、ネタようだから。本気装備は別であるし、全武器。」

勘違いされてもらっちゃ困る。

「あ、じゃあ。クエスト貼ってもいいかな？」

『いいよ。』

私は、ふんたーではない、そういえば、親友だったゆうたは元気だろうか。

「貼りましたー。」

『はーい。やった、ようやくお兄ちゃんとゲームできる。え？』

妹の声が明るい声から驚きの声に変わっていた。

貼ったクエストは妹のランクでも受けることができる古滅龍ヴェルジェ・ツェアシュテーレンの討伐なのにな。

・ホワダイちゃんのトラウマ

・裏ボス降臨

・経験値効率はいい、だがこいつは。

え、そんなに強かったけ、こいつ。

「前、太刀でなら5分針討伐できましたし、全武器で討伐してるんで。」

・全武器ｗｗ

・あー。

「正直言って、引くほど強かったかな？っていう感じです。」

・それはおかしい。

・草

『お兄ちゃん、わかったからこのクエスト行くよ。』

「猫飯は食ったか？」

俺はヴェルジェ・ツェアシュテーレンについて話している間に食っておいたからね。

『食べたよ。じゃあ、クエストにしゅっぱーつ。』

◇　◇　◇　◇　◇　◇

『いや待って。咆哮回避できなかった。』

ホワダイが力尽きました。残り回数３回

・あ。

・乙。

え？何で？

俺は咆哮をＣＦＣで高出力を解除して盾強化したんだけどな。

ちなみにだけどこいつ咆哮も含めて全てのダメージ判定に即死が付いてるから当たったら終わりなんだよね。残り３回なのはこのクエストは四乙までできるクエストだからだ。まぁ、盾がある武器だと防げればあまりダメージ受けないんだけどね。

『何とかなるはずだ。』

・ならない。
・武器を変えてきたのか。

どうやら、妹はランスに持ち替えたようだ、って待って。
ガード貫通攻撃に当たって乙ってるやん、あんなのフレーム回避で余裕なのに。

ホワダイが力尽きました。残り回数２回

『え？』

・ガード無効ブレス
・２乙め

「あのー、盾持ってたら大丈夫と思わない方がいいですよ。フレーム回避とかしないと。」
『ごめーん。』

・もっともである。
・なお本人は剣強化で切っている模様。

「ふう、ようやく第二形態か。」

・早。

ホワダイが力尽きました。残り回数１回

・草ァ!!
・ふんたーですか？
・無言３乙

『なんでさ、何で移動で無防備な時に咆哮を食らうのよ。』

・お疲れ。
・今日はもうやめときな。

「夜ご飯食べてないでしょ、折角用意しておいたのに。俺はもう食べたけど。」
『ぐぬぬぅ。』

・何も言えないみたいだな。
・兄貴の動きやばくね。
・全部避けとる。

『今度こそ、ってあ。』

ホワダイが力尽きました。クエストに失敗しました。

・また移動中。
・ホーミング性能えぐいな。

『もうやだ。』

・今日はもう配信やめな。

『そうする、じゃあ。またねー。』

そう言うと、配信が切れた。どうやら、終わらせたようだ。

はぁ、明日は内部オーディションか。

その日は妹にお休みを言ってから寝た。

8話　社長に呼び出された。

【3月2X日】

明日も、出社ですか。

俺は会社から帰る時にこんなことを言われた。

社長に。

「明日、とっても大事なことを話すから朝一に第一会議室に来なよ。」

いや、俺だけじゃない。他のモンハンの広報や、ゾンビハザードの広報、開発部門、等々が呼ばれていた、紅宮Dも呼ばれたらしい。

ほんと何があるんだか。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

【３月２Ｘ日】

次の日の朝九時、まぁ、前回の会議よりだいぶ早い時間に召集がかかっていた。
いや、今回が異例というべきか。普通は十時からだからね会議は。

第一会議室、それは会社で一番大きな会議室でその大きさのあまりなかなか使われることのない、ということなのだが…。まぁ、ほかの会議室じゃ、この人数は入りきらないからね、何せ様々な部門、担当、の人たちにも召集がかかっているのだ、尤も開発部門はベテランと新人しかいないらしい。ディレクターも五人くらい呼ばれていてあと、人事部の偉い人とか営業部の偉い人とかたくさんだ。本当に何があるのだろうか。おいおい、お偉いさんも含めて３００人くらい人いるじゃん。

「えー、諸君らに集まってもらったのは、簡単な話だ。我々、Ｃ＆Ｇは新しくｖｔｕｂｅｒに力を入れた子会社というか事務所を立ち上げることにした。そして、それの打ち合わせだ。ｖｔｕｂｅｒとかそこら辺の方針は変わらないから安心してくれ。」

方針は変わらない、か。まぁ、そうなんだろうね。

「事務所名はクリエイトバーチャル、まぁ、あれようちの会社がｃｒｅａｔｅ＆ｇａｍｅｓだからそれの派生よ。そして、その事務所もといい会社の社長はまぁ、私の独断で悪いけど言い出しっぺの現ディレクターの紅宮凛にしてもらうわ。」

「え〟？」

『おー。』

幸いにもこのことに反対意見が出ることがなかった。まぁ、一人驚いている人はいたが。

本人は自分が社長になると思っていなかったようだ。

「え、じゃあＭＨＸ５は誰がディレクターをやるんですか？」

「辻森さん。」

「つえ。」

辻森さんもといい辻森Ｄ、派生作品のＰＣ限定のシリーズ、モンスターハントマスターズのディレクターを務めたことで有名で何より社内での信頼が一番厚い人である、尤も数年前に約１８年にも及ぶ伝説は幕を閉じたが。

「マジですか!!」
「えぇ、マジですよ。」

まさか、ねぇ、紅宮Ｄの代わりのディレクターが辻森Ｄになるとは。
そういえば、事務所の場所ってどこになるんだ。
聞いてみなくちゃ。

「あの、すみません。事務所の場所ってどこになるんですか?」
「事務所の場所ねぇ、秋葉原わよ。」

なんだって、おいおい、アキバやと。

『え?秋葉原。』

今日来てた全員がこう言った。

「あと、今日呼ばれた広報の面々はｖｔｕｂｅｒになる人だからよろしく。それ以外の面々も事務所の方でマネージャーとか営業とかいろいろとやってもらうことになるからよろしく。あと、イラストの依頼はこちらで出しておくから、誰のママが誰なのか分かったらその人を飲みに誘ってみたら。」

そう言い残して社長は去っていった。

そこに取り残された私たちはただ、笑うしかなかった。

９＋１０話　緊急事態とお買い物

【３月２Ｘ日】

珍しく家に帰ると親父が居た。

「おにぃ。お帰り。」「ただいま。」

「久遠、お帰りー。」「ただいま。珍しいね親父。」

「まぁ、そうなんだけどな。俺、名古屋に転勤になった。」

「そうなのか、俺はそろそろ在宅勤務になるから大丈夫だと思うよ。」

「あれ？お前の職場って在宅できたっけ？」

「こっちにもいろいろあるんですよ、いろいろ。」

そう言いながら私はスマホを取り出し今日の帰ってくる前に登録したｄｏｓｃｏｄ

eのグループで一応報告しておく。

親父の都合で名古屋に引っ越しすることになったんだど。

凛

マジですか。あ、でも新年度まで時間ありますよね。
あと、妹さん大丈夫なんですか？

零

久遠さん、その話本当ですか？
良かったら来月のデータ受け取りやらなんやらの時に家に泊めてあげますよ。

いえ、零さん。お気持ちだけいただいておきます。

悠太
誰かＭｙｃｒａｆｔやりましょうよ。

海斗
元ＨＵＮＴＥＲふんたーは黙ってろ。
まぁ、やるよマイクラ。

悠太が通話を開始しました。

桜華
私もやる―。

そういえば、他言無用でお願いしたいんだけど。

妹がｖｔｕｂｅｒだって話しする？

悠太
マジで?あとで話を聞かせてクレメンス。

海斗
そういえば、妹ちゃんってどこの高校なの?

凛
え゛。マジですか。後で、チャンネル名とか教えてください。

零
おー、マジか。

そういえば、高校じゃなくてな、高専なんだよ。
親父が教師で、なんなら私よりも頭がいいからな。

少しポンコツで可愛いけど。
愛知県にある高専だぜ。

海斗
愛知県にある高専ねぇ。あー、豊田にある高専か。
そうそう。俺は上の下くらいの私立だったからな。
海斗
それだったら確かにお前より頭いいわ。
じゃあ一旦私は会話やめるね。

そう書き込んで私はスマホの画面を消した。この間、一分だ。
「大丈夫だったよ。」

「そう。なら良かった。」
「あ、自分は顔合わせがあってもう明後日名古屋の方に行くから。新しい一軒家の住所がわかったらＲＩＮＥで連絡するからね。手続きは全部自分が済ましておくから安心して。」
「分かった。」
「自分はもう寝るから、お休み。」
「「お休み。」」
そう言って親父、神坂響は部屋に寝に行った。
「早く寝たら?マイシスター。」
私は妹の心配をしてそう聞いた。
「大丈夫、あと。新しい家私の部屋は防音にしてもらった、周りの音が入ってきたら危ないからね。身バレとかにもつながるし。」
「そうか。」
そういえば、パソコンって。あー、もう一台買うか、ゲーム用じゃないけど３０万円くらいするやつ。
支給はされないからね、絵とかなんとかは支給されるみたいだけど。そういえば、妹が使っているパソコンって何なのさ。

「そういえば、妹は何万円くらいするパソコンを使っているんだい？」
「２５万円くらいだとか言ってたかな、マネージャーさんが。事務所からの支給品だからさー。」
　なるほどねー。まぁ、社会人になった年に年末ジ●ンボ宝くじで一億円当選したからね。まぁ、ｐｃとかグラボとかにしか使ってないけど。
「私も新しいｐｃ買いたいからさ、明日にでも一緒に買いに行く？」
「行く!!」
　そう、大きな声で妹は返事をしてきた。
　俺も４０００万円くらい出しますか、家に。親父が驚くだろうけど。
「そういえば、どこに所属してるの？」
　私は凛に聞かれたことを聞くことにする。
「えっとね、バーチャルライフってところ。」
「へぇー、そうなんだ。」
　そうして、私はｄｏｓｃｏｄｅに書き込むのだった。
【３月２ｘ日】

　私はいま愛しの妹とデートじゃなかった、買い物に来ている。

妹には予算は５０万円までと言っておいた、どうしようか。本当に今日買おうかな自分のもの。

いや、ダメだな。引っ越しの時に輸送料が掛かりすぎる。まぁ、ノーパソとｓｗａｔｈなら持っていけるかなキャリーバッグで。

ｗｅｂカメラ位ならいいの買えるかな、あ、あった２０万円くらいかなら買うか。そんなことを思いながら私はｗｅｂカメラをカートに入れる。買いたいのはこのぐらいかな。後は妹のところに行くとしますか。

妹を探すと思いのほか近くにいた、ちょうどａｒｅｒｉａのゲーミングパソコンが売っているところだ。

「あ、お兄。」

妹が何か物欲しそうな顔でこっちを見てくる。

「なにかいいの見つかった？」

「うん、でも少しだけ予算オーバーしちゃうかもだけど。」

「別にいいよ、買ってあげる。」

そう答えたら妹はものすごい速さでとあるｐｃの箱に指をさした。

へぇー、ａｒｅｒｉａのデスクトップパソコンで税込みで５１万円か。

「これならいいね。うん、買ってあげるよ。」

「やった、ありがとうお兄ちゃん。」

そう満面の笑みを浮かべて妹がお礼を言ってきた、惚れちゃうじゃないか。

最高やな、妹の笑顔が見えるのは。

私はシスコンじゃないからね、ただ妹が愛くるしいだけだからね。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

買い物が終わって私達は街の中を歩いていた、すると突然後ろから声をかけられた。

「やぁ、久遠君じゃないか。昨日ぶりだね。」

そう声をかけられて私は後ろに振り向いた。そこには、白いワンピース姿の同僚の桜華、白崎桜華がいた。見た目もあって可愛いからナンパされてそうだ。

「なんだ、桜華か。」
「なんだとわなんだなんだとわ、それはレディに失礼じゃないか。」
「自分の事をレディというならまず普段の破天荒っぷりをどうにかしてくださいよ。」
「私はそんなつもりはないんですけどー。それと君は、ああ成程。久遠君の妹ちゃんか、どうも、君の兄の同僚の白崎桜華だ。よろしくねー。」
「あ、はい。よろしくお願いします。」

そんなやり取りをすると彼女は去っていった。
その後に妹にお兄が女性と話してると感動されたのは内緒だ。

１１＋１２話　事務所と掲示板

【３月２Ｘ日】

「行ってらっしゃい。」

私は東京駅の１６番線から父親である彼を見送る、昨日のうちに私の希望なども伝えておいた何故か聞かれたがＶＣにほかの音が入るのが嫌だからと伝えておいた、勿論四千万円も渡しておいた。頼むから駅近物件にしておいてくれよ、私やマイシスターが困るからさ。

うーん、妹は家で配信やるって言ってたから暇だ、どうしようか。

そういえば昨日に完成したんだっけ事務所、行ってみるかついでにアキバを巡りながら。

あとなんだっけ、あぁ、二期生募集をするんだっけ。私たちがまだデビューしてない

のに、まぁ凸りますか。

秋葉原駅でＪＲを降りて外に出た。そして、前にｄｏｓｃｏｄｅで送られていた事務所の位置を見ながら進んだ、確かここかな？

その地図に書かれたところに来てみるとそこは旧ｃｒｅａｔｅ＆ｇａｍｅｓの秋葉原支社もといいイベント会場だ。マジかよそれでいいんですかい社長。

まあ、そんなことは置いておいて、私は自動ドアを潜った。そこは、前に入った時とは違うほどにまで改造されていた、なんか事務所みたいに。

「いや、事務所だからな。」

どうやら、声が漏れていたみたいだ。

「その声は、ゾンビハザード担当だった柊海斗か。」

「そうだ。」

「て、お前スーツかよ。」

「私は出勤だからな。簡単に言えば面接のな。」

面接ねー、は!!面接、いくらなんでも早すぎないか。

「お前、早いと思っただろ、残念ながら私達は来月にデビューだ、そして、これから面接するのは2期生でデビューは五月だ。まぁ、今日は私が担当だから、というか私は人事兼ライバーになるからな。」
「それは、ご愁傷様です。」
「まぁ、いいさ。そうそう、紅宮社長から業務用のスマホもらってから帰れよ、お前のやつももう出来てたはずだから。」
「分かった。」

そんなやり取りの後、私はエレベーターで、社長室がある四階のボタンを押した。
ポーンと音が鳴りエレベーターが四階で止まりそして、開いた。
そして、私は出て社長室を目指す。

そして、社長室の扉を三回ノックして

「失礼します。」
と言って中に入る。
するとそこには疲れ果てた紅宮社長の姿があった。
「やあ。」
そう、紅宮さんは疲れ果てた声でそう言ってきた。
「やあ、じゃないでしょうに。」
それに、私は返す。
「新人のいろいろで忙しいんだから、まだ人手不足だし。」
「それもそうですね。でも、貴女にデビュー前に倒れられると苦労するのは自分たちなんですよ、リーダー。」
「ははははは、分かったよ。後ハイ、君のスマホ。アレなのは見るなよ。」
「分かってますよ。では、私は帰りますね。あと、私は四月中旬までこっちにいるんで。」
「ええ、わかったわ。それじゃあさようなら。」

そうして、私は事務所を去っていった。
◇　◇　◇　◇　◇　◇
表には必ず裏がある。

例えば紙には表と裏がある、それと同じようにｖｔｕｂｅｒにも表と裏がある。
表を配信だとすると裏は掲示板だろう。
今回はそんな掲示板を見ていこうと思う。

某大手ゲーム会社がＶ業界に進出する、について語るスレ

１：名前：名無しのゲーマー

このスレはクリゲーの子会社、クリＶについて語り合うスレっス。
Ｖなら別に良いっスけど、主軸はこれっス。

２：名前：名無しのふんたー

まさか、あの会社がＶ進出するとはね。

３：名前：名無しのゾンビ

ああ、あれね。早めのエイプリルフールネタじゃないの。

4：名前：名無しの狩人

いや、公式からの発表でそれと同時に、トゥイッターのアカウントも動き出してる。

5：名前：名無しのゾンビ

マジかよ。ちょっと見てくる。

6：名前：名無しのライバー

あのー、その会社ってモンハンとかゾンビハザードとか出してる会社ですか？

7：名前：名無しの狩人

せやで。

８：名前：名無しのライバー

ありがとうございます。

９：名前：名無しのゾンビ

マジだったな、しかも六人の男女のシルエットが描かれたイラストがツイートされてるぞ。

１０：名前：名無しのゲーマー

おー、マジかっス。情報助かるっス。

１１：名前：名無しのライバー

けど、今一期生ってどうなんですかね、バーチャルライフとかだとつい最近に六期生

デビューでしたし。新しい企業って。

12：名前：地方の預言者

何とかなると思うぞ。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

彼ら彼女らの知らないところで物語は動き始める。

１３＋１４話　引っ越しと戻る

【４月Ｘ日】

さて、今日は引っ越しの日だ因みに今東京に残っているのは俺だけだ、妹はもう行ってしまった。

一昨日に一人で。名古屋市の地下鉄沿線にいい感じの空いている一戸建て住宅があったらしく、それもほとんどの部屋が防音の。なので、最低限の機材をもってあちらに行ってしまった。ノーパソとかね。因みに一応私も住んだことがある家らしい、というと高１の時まで住んでた家ですかたしかあそこは名古屋市の地下鉄沿線だったはずだからね。

まぁ、そろそろ入学式だから仕方がないというところもあるけどね。

おやじ曰く冷蔵庫などは売るなり粗大ゴミに出すなり好きにしろとのことだったから昨日のうちに全て専門店に売りに行っておいた。

昨日の夜飯はカロリ●メイトだよ。いや、久々のあの味はなんというか、ほぼ全員で残業した時を思い出す。パソコンは全部昨日のうちに車に積んでおいたからまぁいいでしょう。

この中に、いまの同僚やマネージャー（クリゲーの時の飲み仲間。旧モンハン広報、なおVではなく裏方担当）が来ても何とかなるものがたくさん入っているんだけどな。

まぁ、それはさておきだ。

「なんで貴女が私の家に来るんですかねぇ。尾崎零さん。」

簡単に言えば彼女がるリア凸してきたのだ。

「なんでって簡単な話ですよ、実家に帰るんですよ。」

「で、なぜ。私の家に来る必要が？」

「私、実家名古屋なんですよ。」

「うん、それで？」

「実家まで送ってもらえないでしょうか。」

「はぁ、しゃあないな。今回だけやぞ、これ以降は私は基本的にあっちにいることになるから。」
「ありがとうございます♥」

そうして俺と彼女のドライじゃないな引っ越しと帰省が始まった。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

マジで。
「お前の実家て俺の家の隣だったね。」
「そうですね。」

私は、名古屋周辺についてから彼女の言うことに従って進んで行くと、まさかの私の引っ越し先の隣が彼女の実家だった。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

【４月Ｘ日】

私は今名古屋駅にいる、ちなみにだが隣には「もう実家に住もうかなー。」と考えている零さんがいる。

「で、どうなの。零さん。」
「自由席か指定席か、ですよね。まぁ、隣同士がいいなら指定席ですけど。」
「別に隣同士がいいわけじゃないですし、お寿司。」
「O☆SU☆SIww、けどまぁ東京まで行くわけですから座れないと困りますし指定席で行きましょうかね。」
「まぁ、そうですね。隣じゃないといけないわけじゃないから直近ののぞみの指定席を取り敢えず取ればいいですよね。」
「そうね。」

そんなやり取りの後私達はみどりの窓口に行って少し先の指定席券や乗車券などを購入しようとする。

「隣同士の席が空いておりますがそちらでよろしいでしょうか。」

「え、えっと。」
「ええ、そちらで大丈夫です。」
私がどうしようか困惑しているときに彼女が頼んでしまった。まぁ、指定席が取れただけ良しとしよう。
「では、こちらを。」
そう言って彼は乗車券などを渡してくる。
「ありがとう。」
そして、彼女はその乗車券をそう言って受け取る、そして彼女は窓口を去っていこうとし、私はそれについていく。
そして、窓口を出ると彼女は急変した。
「やった、昔大好きで、今もまた大好きな先輩の隣の座席取れちゃった。」

「え、どういうこと？」
「あ、私としたことが。うふふふふ、乙女の秘密ですよ。」
「あ、はい。そうですか。」

うーん、バリバリ聞こえてたんだけどな。ほんと、こういうのは聞こえないふりをするのが吉だからな。そういえば、何処かで会ったような気がしなくもないけど私が高1の時彼女は小6だったか、もしかして、ねぇ。
そんなこと。

「そういえば、この乗車券あと十分後のやつですね、じゃあさっさと改札通って乗り場にいった方がいいですね。」
「そうだね。」

そう言いながら改札へと向かう、因みに彼女は財布とか以外は手ぶらだ、なぜかと言うと彼女のキャリーバッグは私が持っているからだ、まぁ、私が持っているのは自分用の大きめのリュックサックと彼女のキャリーバッグだ。
重いことはない、決して。柔道で背負い投げで人を担ぎ上げるよりはかるいだろう。

「そういえば、久遠君。」
「なに？」
「今日、私ん家に泊ってかない？」
「え？いやいや、駄目だよ。未婚の女性がそういうことを言ったら。」
「はぁ、じゃあ、朝一に来てくれる？」
「別にそれくらいならいいけど、また何で？」
「いや、もう。実家に住もうと思ったからさ。手伝って。」
「はぁ、分かったよ。」

そんなやり取りをしつつ私達は新幹線が来るのを待った。
そして、乗る予定の新幹線に乗って東京を目指した。その間私達は二人でモンハンをローカルプレイしていた。
「そういえば、ファイナルアップデートまだでしたね。」
「そうですねー。まぁ、誰かの悪乗りでファイナルアップデートまでのデータが入っているんだけどね。流石にｓｗａｔｃｈに入っているのはサブ垢だけどね。」
「これがサブ垢？いや、ちょっとおかしい。」

「いや、これで妹の配信に乱入したからね。」
「マジですか。」
そんなやり取りがあったとかなかったとか。

１５話　これが私のガワですか（困惑）

「うふふ、まるで恋人みたいですね。」

と、彼女は言う。はぁ、マジでやめてくれ、別に嫌というわけじゃないんだけど、周りからの視線が痛いんだ。

「あの、零さん。早く事務所に行きましょうよそろそろ集合時間ですよ。」
「あ、じゃあ、急がないと。凛さんの説教は無駄に長いですからね。」
「まず何で説教される羽目になるんですか。」

私は、説教されると返してくる彼女に呆れる。
まず、何で説教される羽目になるのかと。

まぁ、そんなことは後にして彼女の手を取り時間に間に合うように少し小走りで走る。

本当に遅れたら困るのだこういうやつは。

現在時刻は午前９時５８分危ない集合時間の午前１０時より二分早い。日本人時間大事。

「おい、お前ら遅いぞ。２分早いじゃないか。」
「いや、二分も早いじゃないですか。」
「いや、普通五分前には来るでしょ。」

はぁ、着いたら早々凛と零が言い合いしてるよ、ほんと仲いいよな。

「ほんと、あの二人仲いいですよね。」
「そうだな。」
「ですね。」
「そうだね。」

ほら、満場一致だ。

「いやいや、仲良くないですよ。」

「ほら、やっぱ仲いいじゃん。」
「はぁ、おいお前ら。あの馬鹿二人は置いておいて今日集まってもらった理由について話すぞ。」
「分かったよ、海斗。」
「えっとな、六人分の立ち絵完成しました、絵師さん、まぁ界隈で言えばママは全員別の人だよ。」
「因みに、」「ポンコツ社長さんはちょっと黙っててください。」
「ポンコツって言われた…」（ｐ・ω・、）

まぁ、妥当だな。

「まあ、本当は集まらなくてもいいんだがな。」
「「は？」」

「ｄｏｓｃｏｄｅでファイル送ればいい。」
「スゥー」
「じゃあ何で集めたのかってなるよな。」
「「そうだな。」」
「自己紹介配信、の打ち合わせと立ち絵の動作確認かな多分問題ないだろうけどな、一応だ。プロの人たちがやってくれたから問題ないと思うけどな。」

なるほどねー。プロがやってくれたならおそらく問題ないか。

「あと、各々のイラストはもうｄｏｓｃｏｄｅに送ってあるぞママの連絡先と一緒に。設定とかのパワポと一緒に。」
「分かった。」
「じゃあ、さっそくイラスト開封でもしていきますか。」
「そうだね。神坂君。」

と、私がつぶやいたことにいつの間にか復活していた紅宮社長が反応した。

さっそく常に持っているノーパソにＩＤとパスワードを打ち込んで、ネットにつなげてｄｏｓｃｏｄｅを開いてみる。

そして、私のイラスト、通称ガワを見た時私はものすごく困惑した。

なにこのイケメンは。

「因みに、神坂君のを書いたのは、他のｖｔｕｂｅｒのガワも手掛けているｋｕｒｕｍｉママだぞ、たしかホワダイのママもｋｕｒｕｍｉママだったかな。確か書きたいものは書いたので悔いはないです、って言って納品してくれたし、ｋｕｒｕｍｉママさんは２０代女性だから好みでもか言ったんじゃないかな、それにどことなく神坂君に似ている気がする。」

へー、へぇ、っへ？

「マジですか。妹のあのガワもこの人が書いているんですか。」

「ん？そうだよ。あと、ほかの人のも見てみたら？」
「分かりましたよ。」

そう言って紅宮社長のガワから見ていく、紅宮社長のはハーフパンツに灰色のパーカーという格好のほかにもう一つ添付されていた、そしてそれはまさかのレディーススーツ姿だった、がまぁ社長だからかで終わった、海斗さんは少しヤ〇ザっぽい髪形だった。

桜華さんは高校生くらいのイラストに白いワンピースだった。何より笑えるのは悠太だ普通の青髪イケメンなのにこれまたイラストが添付されていてみると全身ゴア装備だった。

ちなみに零はエルフ耳でパーカーにホットパンツだった。

そしてその後動作確認などをした後ホテルに向かった。

後書き編集

第一章
１６話　自己紹介配信直前

この前の打ち合わせで初配信になる自己紹介配信はリレー形式になった、奇想天外なことだがまぁ、大丈夫だ、それと同時に私達のトゥイッターのアカウントも稼働した、さらに事務所の公式アカウントとｃｒｅａｔｅ＆ｇａｍｅｓの公式アカウントでも配信日時やリレーの順、さらにシルエット無しバージョンの立ち絵イラストも公開された。

というのが、ものの二週間前の話、そして今は台本や稼働後に募集したぼちぼち届いた質問だ。

今はリレー二人目の悠太、Ｖの名前はユウタ・ゴアエルだ。本人が命名していたが「過去の諌め」とか「かっこいいから」とか「はちみつください」とかしか説明してくれなかった、前にモンハンを一緒にやったのだが本当にあのふんたーテンプレのチャット「しっぽきってやくめでしょ。」とかを言ってくるしなんなら装備も病原竜ゴア・ゲゼル一式だし武器も操虫棍というマジでゆうただった、動きはプロハンで和気あいあいと

やっていたのだけれどね、隠す気ないやん、あのゆうたって名前からさ。

なのに、同接が５０００人だってよ、親会社パワーすごいわ。

因みに、一人目は桜華さんで同接が７０００人だった、普通に考えたらおかしいらしいんだよね、因みに私はオオトリでさらに二期生デビューの告知役だ。

折角だし、モンハンの過去作のとあるシーンの使用許可をＣ＆Ｇの本社に取りに行って許可をもらってきた、対応に社長が出てきたのは内緒だ。

いや、待って。ユウタの配信にあのゆうたですか？っていう質問が来ているんだけど、ウイルス生えるやん。

それになんか立ち絵が変わってるし、まさかあいつママに相談してゴア装備を改変して顔が出るようにしてその代わりに頭の上に黒色の天使の輪をつけたのか。

まさにゴアエル、病原の天使ゴアエルだなぁ。

病原の天使かちょっとやだな、周りが狂天症に罹って狂暴化しているわけだ、ノーモーション突進とかしてきそうだな。

そんなことを考えているうちに悠太の配信が終わって海斗の配信になった、あの人や

ばい気がする、あの人絶対自己紹介配信にガッチガチのパワポ作ってきてるでしょ。

あ…。あの人ミスって配信開始と同時にパワポ開いちゃってるじゃん、おかげで赤い枠の中にパワーポ●ントて書かれたのが見えちゃってるじゃん。

『どうも、クリエイトバーチャル所属のアラサーの柊海斗です。』

・初手放送事故
・パワポ配信
・虚空配信の匂い

あ、これオワタやん、まぁもうスルーして時間までリハーサルやっておこうかな。

そう思い私はリハーサル、効果を入れるタイミングや機器の動作確認などを行い始めた。

17話　初配信

あぁ、緊張するのはいつぶりだろうか。
私は配信の待機画面を見ながらそう考える、最後に緊張したのがいつだったかを。
さて、時間だ。配信画面に移されたカウントダウンももう残り十秒になっている。
さぁ、始めようじゃないか。
デビュー配信を。
「はい、おはこんばんにちわ。クリエイトバーチャル所属の神楽坂久遠です。」
・きちゃ
・オオトリと聞いて。
・重大な告知があると聞いて。
・長男の配信と聞いて。《ｋｕｒｕｍｉ》
「ママァ!!おっと、私としたことが取り乱してしまいました。」
・初手、ママァ!!
・さすが社会人。
・場を生きるのは慣れているご様子。

・だがここはネットの世界。

「本当はリスナーの皆様の意見でタグとか決めたかったんですけど。トウイッターで投票されたものをタグなどにしていこうと思います。」

・それってリスナーの意見じゃない？

・ｗｗｗ

・ｌｏｌ

「まず、リスナーのみんなの名前は。久遠の民です。ちなみに久遠とは永遠という意味です。」

・久遠の民、実にいい響きだ。

・永遠か。

・終わるんじゃねえぞ。

「コメ欄にカンタムのオルカおるやん。」

・オルカ

・そのネタが通じる人か。

・いや、コラで知った可能性が。

「カンタムは全作品見てますよ。」

・違った。

・普通に見てる人だった。

「さて次行くよ、ファンアートとｒ指定のやつのタグを言っていくよ。」

・マジですか《塩昆布》

・ちょっと、ネキいるんだけど。

・草

「塩昆布ってあの同人誌作家ですよね。絵柄が好きです、お世話になってます。」

・告られた／／／《塩昆布》

・おい。

・あー。

「さて、気を取り直して。まず普通のファンアートタグは神楽坂アートでｒ指定のやつは闇堕ち神楽坂アートです。」

・よし。

・ヨシ《塩昆布》

・あー、やりやがった。

「さて最後は、えー。配信タグの発表だよ。配信タグは久遠の配信だよ、相変わらず安直だよね。」

・シンプルイズベスト

・永遠の配信
・ブラックそう。
「さて、公表しなきゃいけないことは公表したから配信終わるね。」
・え。
・ウソダドンドコドーン。
・オン●ウル語やめろ。
さて、スイッチを入れていこうじゃないか。

ここからが私の配信の本番だ。
コメント欄は放送事故だとか言われてるけど計算なんだよね。
「な、なぜだ。なぜ配信が終わらない。」
～～ＷＡＲＮＩＮＧ～～
「チックショウ、テガッレクスの乱入イベかよ。」
・流れが変わった
・さぁ、イッツアショウタイム《ユウタ・ゴアエル》
・ここからが本番ですわよ。《ｃｒｅａｔｅ＆ｇａｍｅｓ社長》
『クリエイトバーチャル、二期生デビュー決定。構成メンバーはなんと全員女性で全員

高校生”らしい”』

という字幕とともに４人の女性らしきシルエットが背景に表示された。

「はい、これにて。一期生のデビュー配信リレを終わります。お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。告知につきましては、クリエイトバーチャルの公式サイトやｃｒｅａｔｅ＆ｇａｍｅｓの公式トゥイッターやクリエイトバーチャルの公式トゥイッターをご覧ください。」

そう言って、私は配信を切った。ちゃんと確認して配信が切れているか確認したから大丈夫なはずだ。

「ふう、疲れた。まさかメンタルが削れるとは。」

おっと、拡散しないとな。

その後、私はトゥイッターで公式のツイートを拡散してから寝た。

よほど疲れていたのだろう、一時間後に起こされるまでぐっすりだったそうだ。

１８話　掲示板より。

「どうやら全員の初配信が上手く行ったみたいだ。」
私が誰だと疑問に思う人もいるかもしれないな。
私は紅宮葵だ、まぁ凛の姉でｃｒｅａｔｅ＆ｇａｍｅｓの社長といった感じだな、世襲じゃないからなまだ私は三十代だからな、実力だからな。
さて、今回のデビューについてのネットというか某掲示板を見ていこうと思う。
どこかの誰かが立ち上げたスレをね。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

クリエイトバーチャルについて語り合うスレ

１：名無しのライフ　ＩＤ：２ｂｃｂｎ７ｊＪｅ

このスレはクリエイトバーチャルについて語り合うスレです。

他箱の話題は極力出さないようお願いしますします。
２：名無しのライフ　ＩＤ：ｒｌｘｇｓＭｇｎＣ
　≫１　スレ立て乙
３：名無しのライフ　ＩＤ：ＱｒＬｍｈｊｕｄｚ
　≫１　乙
４：名無しのライフ　ＩＤ：９ｊａｌＷ９ｅＦｄ
　配信どうだった？
５：名無しのライフ　ＩＤ：ｋＰＶｒｗＫｕＶ８
　最高や、パワポおじさん。
６：名無しのライフ　ＩＤ：ｅＸＮＣｖｆＨｅ９
　というか、久遠めっちゃイケメンやそれにイケボやから女性ファンたくさんできそうやな。
７：名無しのライフ　ＩＤ：Ｈｔ７ｕｘＵＫｂ＋
　それな。
８：名無しのライフ　ＩＤ：ｙ＋ＹＫ／ＣＣ９ｑ
　久遠に惚れました、ユウタは知りません。
９：名無しのライフ　ＩＤ：ＳＹＡＴＹＯｃｈａｎ

ユウタか久遠のモンハン実況見てみたいわ。
１０：名無しのライフ　ＩＤ：２ｂｃｂｎ７ｊＪｅ
それマジでわかる。
１１：名無しのライフ　ＩＤ：ＱｒＬｍｈｊｕｄｚ
≫１０　≫１１
良いお知らせがある、明日の二時からクリエイトバーチャルの箱内四人でモンハンをやるらしい。
１２：名無しのライフ　ＩＤ：２ｂｃｂｎ７ｊＪｅ
マジかよ。最高じゃん。誰がコラボするの？
１３：名無しのライフ　ＩＤ：ＱｒＬｍｈｊｕｄｚ
神無月久遠とユウタ・ゴアエル、神谷麟、月夜零の四人だね。
１４：名無しのライフ　ＩＤ：ｅＸＮＣｖｆＨｅ９
同じ箱だから許されるコラボだな。これが他箱コラボだと…
１５：名無しのライフ　ＩＤ：ＳＹＡＴＹＯｃｈａｎ
これって他箱コラボだったら炎上しない？というか他箱で炎上してる人いたよね？
１６：名無しのライフ　ＩＤ：ＱｒＬｍｈｊｕｄｚ
炎上してたね。

１７：名無しのライフ　ＩＤ：ｅＸＮＣｖｆＨｅ９
　コラボも楽しみやけどもう一つ楽しみなことあるやろ。
１８：名無しのライフ　ＩＤ：２ｂｃｂｎ７ｊＪｅ
　何だったけ？
１９：名無しのライフ　ＩＤ：ｅＸＮＣｖｆＨｅ９
　二期生の公表だよ。今回分かったのは全員が女子高生らしいってことやろ。それも、あの公表の声今作のモンハンのヒロイン枠の声優だった橘紗綾がやっているというね。
２０：名無しのライフ　ＩＤ：ＳＹＡＴＹＯｃｈａｎ
　どこかで聞き覚えのある声だと思ったらその声だったのね。
２１：名無しのライフ　ＩＤ：２ｂｃｂｎ７ｊＪｅ
　あー、それは楽しみだな。で、いつデビューとか公表されてたっけ？
２２：名無しのライフ　ＩＤ：ＱｒＬｍｈｊｕｄｚ
　四月中にアカウント自体は活動し始めてゴールデンウイーク位に初配信とか来るんじゃないの？
２３：名無しのライフ　ＩＤ：ｅＸＮＣｖｆＨｅ９
　狙うならそこやろうな。
２４：名無しのライフ　ＩＤ：ｓｙｕＫＵＲＩＭＵ

あのー、ホワダイさんが今度は対戦ゲームでお兄ちゃんと遊ぶかもとツイートしているんですが。
２５：名無しのライフ　ＩＤ：９ｊａｌＷ９ｅＦｄ
そうか、ホワダイは知らないのか。
２６：名無しのライフ　ＩＤ：ＱｒＬｍｈｊｕｄｚ
まあ、教えなくていいんじゃない？逆に面白くなりそうだし。
２７：名無しのライフ　ＩＤ：ＳＹＡＴＹＯｃｈａｎ
それもそうだね、まあ、その結果がどうなるのかは知らないけど。
２８：名無しのライフ　ＩＤ：ｅＸＮＣｖｆＨｅ９
あー、そうか。炎上の可能性があるのか。
２９：名無しのライフ　ＩＤ：ＳＹＡＴＹＯｃｈａｎ
そういうことだ。
３０：名無しのライフ　ＩＤ：９ｊａｌＷ９ｅＦｄ
まぁ、ドッキリならセーフだろ。
３１：名無しのライフ　ＩＤ：ｅＸＮＣｖｆＨｅ９
大丈夫だといいけど。
３２：名無しのライフ　ＩＤ：ｓｙｕｕＫＵＲＩＭＵ

あと、このスレを見た人か自力で答えにたどり着いた人が二人のカップリングの絵を描いているんですが、尚それをやっているのは塩昆布ネキ
３３：名無しのライフ　ＩＤ：ＱｒＬｍｈｊｕｄｚ
マジかよ。
３４：名無しのライフ　ＩＤ：ＳＹＡＴＹＯｃｈａｎ
そういえば、コラボの時に全てわかるんじゃないの？ほら、モンハンのアカウント名。
３５：名無しのライフ　ＩＤ：ＱｒＬｍｈｊｕｄｚ
確かにそうやな、なんなら彼元（現？）社会人やろ、ならその前に伝えるのでは？
３６：名無しのライフ　ＩＤ：２ｂｃｂｎ７ｊＪｅ
まあ、伝えずにドッキリという形でも私は面白いからな。
３７：名無しのライフ　ＩＤ：ｓｙｕＫＵＲＩＭＵ
けどな、あちらさんにはそれを良くしないユニコーンだったりがいるんだ。
３８：名無しのライフ　ＩＤ：ＳＹＡＴＹＯｃｈａｎ
確かにな。そういえば、マイクラとかやるんかな。
３９：名無しのライフ　ＩＤ：Ａｓｅｎａｒｕｔｏｒｉ
しらん。でも、親会社がゲーム会社だからクソ強鯖持ってきそうだけどね。
４０：名無しのライフ　ＩＤ：９ｊａｌＷ９ｅＦｄ

それは分かる、いやでも立て方がパソコンじゃないといけないんじゃ。
４１：名無しのライフ　ＩＤ：ｔ６ｎＺｚ９ａＦＲ
でも、あそこはＭＨＭでパソコン四台で回したっていう実績があるし余裕なんじゃね？
４２：名無しのライフ　ＩＤ：ｓｙｕｕＫＵＲＩＭＵ
確かにそうだな。
４２：預言者　ＩＤ：ＹＯＧＥＮｓｙａ
我預言者也、おそらくすぐに発表がある。ＧＷあたりに遊び始める。
４２：名無しのライフ　ＩＤ：ＳＹＡＴＹＯｃｈａｎ
預言者ｗｗ
◇　◇　◇　◇　◇　◇
はぁ、こんなもんで良いか。
こんど部下にクリエイトバーチャル用にマイクラサーバー立ち上げてもらうか、ものすごくいいのを。
はぁ、疲れた。
「姉さん、早く寝たらどうですか？」
そう部屋の入り口から妹の声が聞こえてきた。

さて、聞いてみるか。彼女はそういう方面には強いからね。
「ねぇ、バーチャルライフのマイクラ鯖立てた方がいい？いいなら提案してくるけど。」
「え、お願いします。」
はぁ、ほんと姉妹の間で敬語はやめてほしい。
「分かったよ、提案してくる。それじゃ、おやすみなさい。」
「えぇ、おやすみなさい。」
そうして私はパソコンの電源を落としてベットにねた

１９話　一狩り行こうぜ!!

デビューから一夜が経った、今日は昨日二期生デビューの告知の拡散をした後に拡散しておいたモンハン四人コラボの開催日だ。

まぁ、それ以前に一応決まっていたのだが…私はどのアカウントを使えばいいんだ、だってよ本垢は未公開情報が入っているからマルチ不可になってるし裏垢はホワダイの配信に出てるから、と社長いやもう凛さんでいいか、が「別に裏垢使えばいいんじゃない？」と言ってきた、マジかよ。

まぁ、いいか。さて、準備だ準備、ｓｗａｔｃｈとそれに接続したディスプレイとＰＬＳ５とディスプレイそして、ノートパソコンの電源をつけて全ての音量を０にしてそのすべてでｙａｏｔｕｂｅでそれぞれの待機画面を開いて、それと本命のＰＣとディスプレイにはもうとっくに配信の待機画面が写っていてカウントダウンが始まっている、もう五分のカウントダウンか。

『おーい、神坂ー、いやもう神無月ー手呼んだ方がいいか。おーい、神無月ー生きてる

かー。』

と、ｄｏｓｃｏｄｅの向こう側から聞こえてきた。この声はユウタか。

「生きてるよー。」
『おーい、死んでるのかー、死んでるなら返事しろー。』
「おい、ユウタふざけるなよ。」
『ユウタついに認知症になったか？』
『認知症になってないよふざけているだけだよ、というかこの中で俺が一番若いの知っているだろ。』
「そういえば、そうだね。でだ、配信で何倒しに行く？ヴェルジェ・ツェアシュテーレンでも倒しに行く？」
『やめろ、まず、あのモンスターは宮下Ｄの気の迷いだ、まずな倒した報告している奴すらごく少数なんだぞ。』
「え、そうなんですか？」
『おい、麟さんこの人壊れてますよ。それに、最短五分以内で討伐しているし全武器討伐済みとか言ってるらしいですよ。』

『『ちょっと待て、マジなんか？』』
「あー、マジですよ。それに全クエスト、隠しクエストも含めて全てクリア済みですよ。なら、常識的な奴でモンハンの看板モンスのレオレウス討伐しに行きましょうよ、私持ってますよ傀儡化レオレウスとレオレウス亜種とレオレウス希少種とヌシ・レオレウスのクエスト。」
『じゃあそれ行きましょうか。』
『そうですね。』
『そうだな。』
「じゃあ、一旦ここの通話ミュートにしておくぞ。もうあと一分だから。」
『『『りょ。』』』

さて、水分ヨシ動作ヨシ配信の開始位置ヨシ。

さぁてＯＰ＋１０秒カウントダウンというまぁまぁ手の込んだやつが流れているだろう、因みにそれは私とこれまたモンハン広報部から引っこ抜かれたマネージャーだ。まぁ、本人は月給が上がったしコミケにも行けると喜んでいた。

本当に大丈夫か、あいつ。働きすぎで倒れないかな？
倒れてもらったら困るんだけど、あぁ、でも柊は人事部だし、紅宮は社長だし既にブラックなのか。

さて、これからは神無月久遠としていこうじゃないか。

「はい、はじめましての人は初めまして、そして、おはこんばんにちは。バーチャルライフ所属の神無月久遠です。」

・きちゃ
・所見です。
・社会人です。

「社会人の人もいるのか。よろしく、私は元社会人だ。」

・転職。
・場合によっては社会人でもいいんじゃ。

・さては、逃げたのか？

「逃げてませんよー。」

・これ、モンハン配信と聞いたんですが。

・いや、まだ合流してないから。

そんなコメント欄を見ながらほかの配信の様子も確認する。

「さて、そろそろほかの人たちも準備ができたみたいだから、この味気ない背景から一気にモンハンの画面に変えるよ。それ。」

そう言うと同時に私はもともとセッティングしておいた設定などに変更する。

「うん、問題ないようだね。」

・めっちゃキーボードの音したんだけど。

・このキーボードの音は、え？
・すごーい。

そして、背景を変えたところから順にｄｏｓｃｏｄｅのミュートを解除していく。

『モンハンコラボｖｏｌ．１始まるぜ。どうも、得意武器は操虫杭どうもユウタ・ゴアエルだぜ。』
『得意武器はガンアックス、どうも紅宮麟です。』
『得意武器は弓、どうも月夜零です。』
「え、得意武器って言わなきゃダメですか？」
『あー、お前はイレギュラーだからな。』
『化け物。』
『頭がおかしいやつ。』
「はー、得意武器は全武器どうも神無月久遠です。」

・全武器
・やっぱり、ユウタじゃねえか。

・イレギュラー

『はちみつください。』
『ほい』
『はい』
「ぽい」
『うおー、３０個のハチミツだぁー。』

・うるせぇ！
・はちみつください
・なにそれ？

「若い人かな。分からないなら説明してあげよう。むかしむかし、ふんたーというものありけり。」
『久遠くんストーップ。』
『てめぇー、馬鹿長い物語話す気だったろ。』

・竹取物語？
・確かに、むかしむかしだ。
・ネット世紀、大昔。

「さて、何のクエストをやりますか？」
『おめーさん、裏で良いクエストがあると言っていたじゃないか。』
「あー、レオレウスのクエストかい？それとも、幻想龍イリュージョナルの特殊固体のクエストですか？」
『前者だ』
『そうそう。』
『あ、そういえば、クリゲーの社長さんがＭｙｃｒａｆｔのマルチ鯖のよういしてくれるらしいよ。』
「へぇ。」

私は別にほかのゲームが嫌いというわけではない、ただ回避ができないのが嫌なのだ、まぁ、マイクラ程度だったら作業厨としてやっていけるだろうけどね。

「そうなんですか。」
『なんだ、モンハン以外やりたくないのか？』
「いや、フレーム回避ができれば問題ない。」

・フレーム回避命
・お前、マイクラもＦｏｔｅｘもフレーム回避ないぞ。
・草

「あ、そうじゃん。まぁいいや回避に頼らずによければいいだけだし。」
『それができたら苦労しない。』
『まさかのお前でもそんなことできないよな、な？』
「前に実の妹と父親でＦｏｔｅｘやったら一回で爪痕とダブミサ取れましたけど？」
『化け物。』
『初プレイとか言わねぇよなぁ？』
「初プレイだ、私は。」

駄目だ、話が完全に逸れてる。

『ハイハイ、Ｆｏｔｅｘの話はそれくらいにしてモンハンやりますよー。』
「はーい。」
『クエスト貼って役目でしょ？』
『それを言うなら尻尾切って役目でしょ？だろ。』

・本物出た。
・流石、本場の味は違うな。

そんなコメント欄を流し見しながら私はレオレウス計四頭と？マークの付いた龍のクエストを貼る。
そう、このクエストは極低確率でしか出現しないクエスト幻想龍覚醒イリュージョナルの特殊固体が乱入するクエストだ、やったね看板モンスターだよ。

『あれ？何かおかしいぞ。』
『四頭クエという話じゃなかったか？』
『チッ、よりによってこのクエストかよ。』

・なに、???って。
・しらん。
・まさかとは思うけど、いやでもあのモンスターが出るクエストが出現させるためには全クエストを五分以内に倒さないといけないんじゃ。

「お、今気が付いた人いたね、もしかして同志か？ＴＡプレイヤーか？」

・あぁ、そうさということはあなたも？
・なんかやってる。

「あぁ、俺もＴＡプレイヤーだ。」

・おぉ、あなたもでしたか。《霧崎機龍》
・え？
・ちょっま。

「え、機龍さん。え?あの機龍さん。」

・そうだぜ、チャンネル登録者数１００万人超えているゲーム実況者霧崎機龍だぜ。《霧崎機龍》

・大物の人来ちゃった。

・おいおいおいおい。

「そういえば、モンハンは参加型じゃなくてＴＡ専門でしたね。」

・あぁ、だからその構成のクエストも見たことがあるんだぜ。《霧崎機龍》

・そういう。

・成程。

・まぁ、倒せてないけどな。《霧崎機龍》

「私は灼獄龍覚醒インフェルノとの二頭狩猟で何とか倒せましたよ。」

・化け物。《霧崎機龍》

「さて、クエストの準備はできましたか?」
『できたぜ。』

成程、ユウタはフル覚醒のゴア・ゲゼル一式か何気にスキルが強いんだよね。

『できました。』

と、麟はおいおい、古滅龍ヴェルジェ・ツェアシュテーレンのフル装備じゃないか、あれ全部にレア素材必要なんだよな、まぁ、全武器の装備分持ってるけどさ。と思ったけどこの装備やばいぞ、覚醒させて物凄くやばい装備になってるんだけど。なんだよ、爆裂術Ｌｖ．５って、ガンアックス御用達のスキルの最大レベルじゃん。

『私もできました。』

で、零はへぇ、キメラか特殊スキルは発動されるようになってるけど確かにこの組み合わせは弓にとっては最適解かもな。

「じゃあ、行くぞ。」

そう言って私はクエストを始めた、尤も私はクエストが始まってから準備する人間だからな。

ほら。

ｋｕｏｎが力尽きました。残り回数２回

ｋｕｏｎが力尽きました。残り回数１回

さて、これからが本番だ。

『こいつやりやがった。』

『乙るの厳禁ルート』

『乙れないじゃん。』

・サラッと不屈やりやがった。
・ＴＡプレイヤーだもの。
・そうそう、俺もそれがしたいからモンハンだけ参加型やらないんだよね。《霧崎機龍》

大丈夫だろうかこの配信。

２０話　一狩り行こうぜ!!２

私はクエストで速攻に二回自滅して、仲間を背水の陣に立たせると同時に自身の強化もできた。まぁ、その影響もあってか、例のモンスターが来るまでは何事もなくただ淡々と倒していた。

そう、あのモンスターが出るまでは。

幻想龍覚醒イリュージョナルの特殊固体、社内でもほぼ完璧に情報が隠されているモンスターでこの存在を知っているのは社長とごく一部のＴＡ勢そしてディレクターとプログラマーなどのごく一部、故に麟も知らないのだ、社長はまぁどうなんだろう、あの人だったら宮下Ｄから情報聞いてそうだし風の噂で普通にどのゲームも得意だと聞いたことがある。

『おいおい、久遠のやつこんなの倒しているとか正気かよ。』

『いつかのノーモーション亜空間アタックを思い出す。』

『そういえば、久遠はどうしているんだ？』

『あいつ、太刀でずっとカウンター続けてます。』

私はこいつの動き方はすべて知っている、今は使えない本垢で散々倒しまくっている

というのもあるがそもそもプログラムしたのが私ともう二人で作った訳だ。
で、あの二人は。うん、今頃フィナーレアップデートの準備だろうなあと二か月だし次の大型が今月だし。
ｖｔｕｂｅｒになってなかったら援軍に行けるんだけどな。
・お前、俺よりバケモンじゃん。《霧崎機龍》
・俺は何を見せられているんだ。
・ねぇ、コラボしないか？《霧崎機龍》
「え？機龍さんいいんですか？」
・なんなら、俺が主催の１６人コラボに参加しないかい？《霧崎機龍》
・サラッと呼んでる。
・そっか、このモンハンもクロスプラットフォームプレイ対応時に１６人集会ができるようになったのか。
「ええ、喜んで。」
『…』
『……』
『……』
もうほかのやつらは声を出す余裕もないようだ。

・もしかして、もしかしなくてもだけど、こいつの動き暗記してたりしないよね。
・んなわけねぇだろ、なぁ？
・そういえば、久遠以外全員攻撃してなくないか？
「おいユウタ、お前キャンプに引きこもってろ。」
『え？いいのか、じゃあそうさせてもらうぞ。』
・いや、それに乗るのかユウタは。
・ユウタはゆうただもの。
・草ァ《霧崎機龍》
・あれ？お兄ちゃん？《ホワダイ》
「あ。」
・え？
・どういうこと？《霧崎機龍》
・やっぱそうだよね、声も動きもアカウントも。《ホワダイ》
『どうした？』
「まずい、ホワダイに見つかった。」
『あ。』
『あぁ。』

『身バレ早すぎじゃね？いや、違うかイラストレーターさんが同じだからそっちなのか。』

「あ、お前。はぁ、えっい。」

そんな掛け声と同時に私は最後のカウンターを決める。

クエストを達成しました。帰還まで６０秒。

・おめ。

・どういうことだよ!?《霧崎機龍》

・一人だけで戦っていたような希ガス。

「ふう、これで全装備製作できる。」

・欲望丸出し。

・は？お前何回こいつと討伐してるの？《霧崎機龍》

「武器十四種と五部位なので十九回ですかね。」

・ば、化け物ダァ。《霧崎機龍》

・お兄ちゃん、部屋に凸ってもいいよね？《ホワダイ》

・妹もよう見とる。

『あーあ、ついにバレちゃったか。』

『もともと時間の問題だって話していたもんな。』

『家凸してもいいですか？』
「やめろ、零のそれはシャレにならない。」
『そういえば、なんでお前はこのクエストの出し方とか知っているんだ？』
・確かに。
・それもそうだ。
・俺は偶々だ。《霧崎機龍》
「これって言ってもいいんですかね、前世に関係あることって。」
『さぁ？』
『しらん。』
『いえばええじゃないか。』
「はいじゃあ、言いますよ、このモンスターの動きをプログラムしたの私あと二人だったわけですよ、だからすべての動きを知っているわけです。どの攻撃がどのダメージかもすべて。」
『そういえば、君は宮下Ｄに引っこ抜かれたんだっけ？』
「ＴＡとバレましてね。」
『彼らしい。』
「おかげで本垢が使えませんよ。未公開情報とかいろいろ入ってますから。」

『これが裏垢？え？』
『？だよな、なぁ、？と言ってくれよ。』
・化け物ダァ
・ウソダドンドコドン
・チョット１６人コラボに呼ぶのが怖くなってきた。《霧崎機龍》
「じゃあ、そろそろ配信やめるよ。」
『そうだな。』
『誰かのせいでめっちゃ集中力使ったんですけど。』
『そうそう、誰かのせいでさ。』
「ということで、Ｔｈａｎｋｓ　ｆｏｒ　ｗａｔｃｈｉｎｇ　ｔｈｉｓ　ｆａｒ．」
そう英語で言って配信を切った、きちんと切ったかも忘れずにだ。
『終わったな。』
「えぇ、終わりましたね。いろいろと。」
『今から行ってあげようか？』
「いや、遠慮しとく。それと、麗華、入ってきていいぞ。」
「お兄ちゃん。なんで私に言わずにｖｔｕｂｅｒになったのさ。」
「はは、文句なら画面の向こうの社長に言ってくれ。あいつが黒幕だ。」

『人聞きの悪い。元はと言えば宮下Dが…』
と、そこで私は何故麗華がここに来たのか気になった。
「そういえば、麗華何かあったの？」
「お母さんが帰ってくるって。」
「そうかい。あ、俺はもう通話から抜けるね。飯作りたいから。」
私は時計を見てそう言う。
『分かったよ。』
「じゃあ。」
そう言って私は通話から抜けた。
「さて麗華、私の身バレどう責任取ってもらおうか。」
「ヒェッ。」
私は悪い笑顔を浮かべてそう言うと、麗華がビビッて一方後退る。
「なんて？だよ。」
そして、今家にある材料を思い浮かべながら。
「今日の夕食は台湾ラーメンかな辛めの。」
「それだけはご勘弁を。」
そう、麗華は辛い物が大の苦手なのである、因みに私と両親は大好きだ、母親がどう

だったかあまり覚えていないが確かに好物だった気がする。

第14話

「親父、母さんが帰ってくるって本当か？」
　私はモンハンのコラボ配信があった夜、私は親父と二人で大格闘バーストブラザースを遊び半分でプレイしながら親父にそう聞いた。
「あぁ、帰ってくる。まぁ、フランスからじゃなくて東京からだけどな。」
「え、東京から？」
　確か母さんはフランスまで出張していたはずだが。
「まぁそうだけど、あとこれからはこの近くで働くらしいぞ、もう働く無くてもいいのにな俺がたくさん稼いでるからな。」
　確かに親父の年収は物凄い額だった気がする。
「けど、だいぶブラックだけどな。」
「まぁ、確かにな。」
「はぁ、俺もなろうかなｖｔｕｂｅｒに。」
　そう、親父が言ったことに耳を疑った。
　どうも、ｖｔｕｂｅｒになろうかなと聞こえたような気がした。

「親父、今なんて言った？」
「ｖｔｕｂｅｒになろうかなと言った、けどやめたぜ今の仕事の方が炎上とかがないから安全でいい。」
「働き方は？」
「働き方改革のことを生徒に伝えてる俺たちが悲しくなる。」
「相変わらずのようで。」
「ああ、そうだよ。」
　そんなやり取りをしながら気が付いたら親父が勝っていたどうやらゲームの腕もまだ落ちていないようだ。
　そして、私は時間が気になり時計を見る、時刻は午後二時…え、午後二時。
「親父、急がないと嫁さんにしばかれるぞ。」
「ヤバい、瑠奈さんにしばかれたら俺生きていけねーぞ。」
　親父は見た目は２０代後半なのだ年齢は４５歳なはずなのに、そういえば、母さんって何の仕事やっているって言っていたけな。
　そんなことを考えながら私は大急ぎで車のカギを取り親父を乗せてモンハンやら少し昔のアニソンを流しながら車を走らせる、いつか配信で歌う日が来るのだろうか。とか思いながら。

いや、私が音痴なのは友達からのお墨付きだからね。歌いたくないよ。
玖瑠美ね、何処かで、いや流石にね。
「そういえば、母さんの仕事ってなんだたっけ？」
「何だったかな、前やってた仕事をかたずけて出張から帰ってきて会社辞めたらしいぞ、なにか嫌な予感がするとか言って。」
確か、母さんの予感はたまにシャレにならないことがあるからな、例えば何があったかな。
「待って、母さんの予感ってシャレにならないんじゃ。」
「あぁ、そういえばそうだったな。」
そう言って親父は遠くを見る、おそらく母さんの予感で当たったことを思い出しているのだろう。
そういえば、とんでもないこと思い出した。
「親父、確か親父の通帳は今は私が握っているよね？」
「そ、そうだな。」
「じゃあ、母さんに握らせても問題ないよね？」
「そうだなってお前、もしかして。」
「じゃあ、そうしておきますね。」

ふう、これで良しっと。ほんとこの人自分で通帳握ると直ぐに寿司を買いまくるんだから。

一人で食べるわけじゃないけど。

まぁ、それで母さんも親父と同じようなことをし始めたら本格的に私が通帳を管理するとしよう。

そうこうしている間に最寄りの地下鉄の駅に着いた。

「親父は折角だし改札まで行きなよ、私はここで待ってるからさ。」

「分かった、行ってくる。」

そう言い親父は車から出ていき入口の方に走っていった。

すると、その親父が入っていた入口とは別の出口から金髪の美人さんが出てきた、遠目で見るとどこか麗華と同じようなパーツだ、尤も麗華は黒髪だけど、ん待って母さんじゃねえかよ。

行かないと。

私は車からおりて鍵をかけて大急ぎで母さんのところに走った。

「母さん!!」

「あら、久遠じゃない。久しぶりね。」

「ええ、母さんこそ、お変わりないようで。」

そしてそれから母さんの様子が一気に変わった。
「そういえば、あの人は？」
「あぁ、親父なら母さんを迎えに改札にってそうじゃん。どうしよう。」
「おいて行けばいいんじゃない、別にあの人帰ってこれるだろうし。」
「いや、無理ですよ。親父急いで出てきたせいで財布を持ってないんですから。私は財布の中に免許書入っているんで持ってますけどね。」
「ッチ、じゃあ、無理なのか。」
「残念ながら。」
母さんはツンデレだからツン？の方が強いようだ、
いや違うか、単に親父のことが嫌いだった、か、そういえば、東京に引っ越してからすぐに喧嘩して会社の出張でフランスまで行ってたんだよね、それで私たちが名古屋に戻ってきたと知ったと同時に出張の期間が終わって日本に帰ってきて会社を辞めてきたのだろう。
「あ、いたいたー。はぁはぁ。」
どうやら、親父が一周して戻ってきたようだ。
「あら、あなた遅かったじゃない。じゃあ、私たちは行くから。一応交通費で千円貸すからあとで返してね。」

「は、はい。」
「ほら行くよ。」
そう言って母さんは俺を引っ張ていった。
大丈夫かな、親父。
まぁ、いいか。

２２話　雑談配信ｖｏｌ．１

【４月Ｘ日】

母さんが帰って来てから数日が経った、妹はもう高専に行っているし、親父は今日も今日とて仕事、うん仕事。母さんは、あの人仕事辞めたの？だよねと私の中ではそういう風になってる。

だってあの人、朝一で誰かが迎えに来て出かけて行ったからね、あと社長とか聞こえたし。

そういえば、母さんの声どこかで聞いたことがある気がするんだけどな。

まぁ、いいか。

そんなことより朝に告知しておいた雑談配信の準備しておかないとな。

今回は一つだけでいいのか立ち上げるパソコンは、複窓できる方法があるみたいだけどめんどくさいから複窓（物理）してるんだよね。

さてと、そろそろ待機作ってもいいよね。

・待機

・なんだ、モンハンじゃないのか。《霧崎機龍》

・モンハンニキ、見にきてのか。《塩昆布》
・俺の久遠はやらないよ。
・俺の久遠だ‼《霧崎機龍》
・何を、久遠は私のです。
・いえ、私のです。《ｋｕｒｕｍｉ》

どうやら、待機している人たちの中で私の取り合いが起きているようだ。
なんで？私、そろそろ３０歳の人だよ、まぁ一人男が混じっているけど。
彼のおかげかどうか知らないけど前のモンハンコラボ配信の時から私だけ物凄く登録者数が増えたんだよね、おかげだよね？
まぁ、新興企業なはずなのに色々とクオリティが高いからね、公式サイトとか色々、あと一期生は社長以外は広報だし社長も自分のアカウントでいろいろとしていたからトウイッターのツイートとかで炎上することはなさそうだからね、配信は零が担当だったかな、たしか。
配信までのカウントダウンが０になり配信が始まる。
「はじめましての人は初めまして、そして、おはこんばんにちは。バーチャルライフ所属の神無月久遠です。」
・おはこんばんにちは《ｋｕｒｕｍｉ》

・チャンネル登録者数やばくない？おはこんばんにちは。
・チャンネル登録者数一万人おめでとう。《霧崎機龍》
「霧崎機龍さん、ありがとうございます。貴方がコメントを打ってくれたおかげで私はここまで来ました。」
・あれ？俺何かした？《霧崎機龍》
・コラボはよ。
・貴方は早く１６人コラボの計画立ててください。
「１６人コラボ楽しみにしてますよ、あ、ちゃんと運営がネタにしてる槍使いのあの人も呼んであげてくださいよ。」
・分かった。《霧崎機龍》
・ヨシ。
・あの話してくれるんじゃないの？あと、一万人突破記念配信もしないとね。《紅宮麟》
「そうじゃないか。何しようか。あ、Ｍｙｃｒａｆｔのサーバー稼働日が決まりました、って早くないですか。それも次の土曜日の０時から、あと七時間後か。よし、枠取ってくるか。いや、もう取ってあったか。」
・は？

・やばいやつ
・何この人。
「いやいや、締め切り寸前のゲームのプログラムよりはましですよ。アッハ。」
・目がきっまていやがる。
・眼だけ笑ってない。
・そーだそーだ。
「今度ゲーム制作配信でもやろうかな、あでもＢＧＭとか絵とかどうしよう。」
・絵は私が。《ｋｕｒｕｍｉ》
・絵は私が!!《塩昆布》
・ＢＧＭは私が。《時乃栄弥》
「ファッ!?アーティスト兼ボカロＰの時乃さんがいるじゃん。」
・え?
・本物じゃん。
・本物ですよ。《時乃栄弥》
「なぁ、私がどの作品からモンハンをやっているか気にならないか?」
・気になる。
・めっちゃ気になる。

・私は知ってる。《時乃栄弥》
「え？何で知っているんですか？栄弥さん。」
・教えない。《時乃栄弥》
・多分でしょ。
・いや、初代のリメイクのゼロじゃない？
「正解は3から始めて2、無印と遡っていった感じだな。因みにポータブルも全部幼馴染とやっているぞ。」
・やっぱりね。《時乃栄弥》
・意味が分からねぇ。
・あぁ、俺もだ。
「はぁ、私は少し散歩してから寝よ。」
・なんで？
・何故だ。
・オンドゥルルラギッタンディスカー
「いや、何でオンド●ル語がコメント欄に流れるの。あ、今夜の0時からマイクラのラストドラゴン討伐耐久やるんで宜しく。それじゃあ、乙遠。」
・乙遠

・ガタ《時乃栄弥》
・なぜお主が動く必要がある。
私は配信を切った、何気に終わりのこういう感じのあいさつを言った気がするな、後は初めの挨拶だけどおはこんばんにちはで別にいいか。
さて、散歩だ、ＭＡＮＳＵＴＡＲでも買ってこようかな、久々に耐久配信もするわけだからね、寝落ちするわけにはいかないからね。
「行ってきます。」
そう言って誰もいないはずの家から出ていく、すると。
「やぁ、お久しぶりね。神坂久遠、配信お疲れ。」
「なんでお前が私の正体を知っているんだ。１０年間くらい会っていなかったはずだろ、なぁ、時乃雫さん、ん？時乃？」
久々に幼馴染に会ってそいついや彼女の名前を言って驚いた、時乃ってさっきの配信にコメントしに来てた時乃Ｐと苗字同じじゃないか。
「はぁ、やっと気が付いたのね。そうよ、私が時乃Ｐこと時乃栄弥よ。」
「へぇ、そうか。さて、徹夜のお供買って来なくちゃ。」
「チョット、スルーかよ。なぁ、それと本当にやるつもりなんだね耐久。」
「そうだよ。」

「応援してるね、昔からＴＡにしか興味なかったお馬鹿さん。」
「は？ＴＡはお前もだろ、それと、あと二人もだろ。」
「ソ、ソウダネ。」
　そうして、私は時乃といろいろなことを話しながら、コンビニに行ってＭＡＮＳＵＴＡＲを買って帰った。